

はじめに

「完全学校週5日制」が 目指したものは何か

深谷昌志

のんびり派と勉強派に二分

平成14年の4月から「学校5日制」が実施された。学校から開放され、子どもがのびのびと自由に過ごせる時間を保障したい。そうした願いを込めての「学校5日制」が導入されたはずだが、発足当時から「学校5日制」と方向の異なる動きが目についた。

もともと、私立校の多くは土曜日に授業を実施して、公立校と差を明らかにしようとしている。親からすれば、土曜日も授業をしてくれるので、私立校の人气が高まる。そうした動きをみて、公立校の中から土曜日の活用を試みる動きが生まれる。県によっては、土曜日に補習授業を試みる県立高校がみられるし、土曜日を活用して総合的な学習を展開する中学校も認められる。

その他、土曜日が休みになるので、学習塾の土曜講座へ子どもを通わせたい。子どもが塾から帰ってきて、「早いテンポで授業が進むので緊張した。でも、先生の熱意が感じられて、あっという間に時間が過ぎた」と興奮して話す。子どもも望むから、これから先、土曜講座へ通わせるつもりだと、知人は話していた。

こうした動きの反面、「学校5日制」を契機に、

家庭でのんびりと過ごす子どもも増えた。親子の団らんを大事にしたいと考えている親もみられる。そうになると、のんびりとする生徒と勉強に精を出す生徒とに、生徒が二分化される可能性が強まる。そして、勉強派の学力が伸び、望みの学校へ進学する状況がみえてくれば、のんびり派の中から勉強派へ転身する者が増加しよう。そうになると、「学校5日制」導入の意味が根本から崩れることになる。

学校からゆとりが消えた

こうした土曜日の使い方とは別に、「学校5日制」の導入は、予想された以上に学校の内部に大きな影響を与えている。学校の内部では、土曜日を授業に使えないので、月曜日から金曜日までの5日間が忙しくなり、授業の絶対時間が減り、やりくりが苦しくなる。

一日に7時間授業を行う中学校も増えた。そうになると、授業の終わりが4時半頃になり、部活動の時間が取れない。そこで、土曜日を部活動にあてる。生徒が部活動をしているから、顧問の先生も休日返上で指導にあたる。運動部では、日曜日に対外試合を行うことも多い。そうになると、教員は土日がサービス勤務で、年中無休となる。

部活動のほかにも、体育祭や文化祭などの学校行事を準備する時間が取れない。そこで、始業式の後には通常の授業をする、あるいは、授業を受けてから終業式を行う学校も多くなった。体育祭や文化祭の中止を決めた学校もある。

そうすると、授業がぎっしりとつまり、学校から息抜きのな時間が減って、子どもは授業に追い回される感じになる。休み時間や給食、修学旅行、体育祭などは、学校生活の周辺に位置している。しかし、そうした活動が減ってくると、学校から潤滑油的な雰囲気が消え、子どもは窒息状態に陥りがちになる。

「完全学校週 5 日制」の理念が崩れる

「学校 5 日制」の導入によって、学校からゆとりが消えた。平日の 5 日間が忙しいだけに、土曜日の使い方が問題になる。土曜日に子どもの体験活動を促す計画が進んでいる地域もある。親が中心となって、子どものスポーツプログラムを展開している学校もある。しかし全体としてみると、土曜日の有効な活用法は模索中で、多くの子どもは土曜日をくつろぐ日にしている。

「学校 5 日制」は公立校で実施されている。しかし、すでにふれたように都市圏の私立校、特に

中学校や高校では、土曜日に授業を行っている学校が多い。公立校は土曜日が休みなのに、私立校の子どもは学校できちんとした授業を受けられる。親としては、土曜日を含めて、学力を高めてくれる私立校に子どもを通わせたいと願う。その結果、私立校の人気の高まるのと反比例する感じで、公立校の地盤沈下が進む。そうした対策として、土曜日の自主的な補習教育を計画している公立高校も多い。そうすると、「学校 5 日制」の理念は、実質的に崩壊する。

さらにいえば、私立校は公立校より学費がかかるから、親の経済的なゆとりによって、土曜日の使い方が決まることにもなる。私立校でなくとも、土曜日に家庭教師を雇ったり、学習塾やスポーツクラブに子どもを通わせてもよい。そうすると、「学校 5 日制」の導入は、子どもの教育を受ける権利が家庭の経済力に左右される状況を生み出す。発足の理念はともあれ、「学校 5 日制」は大きな問題を投げかけているように思う。

どうやら「学校 5 日制」は、当初の理念と異なる方向に進んでいるらしい。ここらで姿勢を立て直し、土曜日をどう使ったらよいかを根本から検討する態度が必要であろう。そのために、当事者である中学生に「学校 5 日制」についての評価を聞くことにした。